

イチゴ「まりひめ」に対する徒長抑制剤の効果

～春先の徒長を防止！～

1. はじめに

農業試験場で育成したイチゴ品種「まりひめ」は早生、多収で、高い果実品質を有する品種であり、県内で産地化を進めている。しかし、「まりひめ」は、従来品種の「さちのか」よりも草勢が強いことから、春先に徒長しやすく、栽培管理がしにくい等の問題点がみられる。

そこで、徒長抑制剤ピピフルフロアブルの散布の有効性と生育、収量に及ぼす影響について検討した。

2. 材料および方法

品種は「まりひめ」を供試した。試験区としてピピフルフロアブル処理区と無処理区の2処理区を設けた。処理区は、ピピフルフロアブルを希釈濃度500倍、株当たり25mlを2012年2月28日と3月27日の2回散布した。2月23日、3月23日、4月20日に株の生育状況および4月末までの時期別収量を調査した。

定植日は2011年9月16日、栽植密度は畝幅1.2m、株間22.5cmの2条植え（7400株/10a）とした。加温機の設定温度は日中12℃、朝夕10℃、夜間5℃とした。電照は12月28日～1月31日の間、4時間の日長延長方式で行った。その他の栽培条件は農業試験場の慣行法とした。

3. 結果

- 1) 草丈は、散布後の3月23日、4月20日ともに処理区が無処理区に比べて低くなった（図1）。
- 2) 葉面積は、2月23日、3月23日では差が認められなかったが、4月20日では、処理区が無処理区に比べて小さかった（図2）。
- 3) 収量は、3月までは差が認められなかったが、4月では処理区が無処理区に比べて少なかった（図3）。
- 4) 4月20日の葉色（SPAD値）は、処理区が無処理区に比べて高かった（データ省略）。

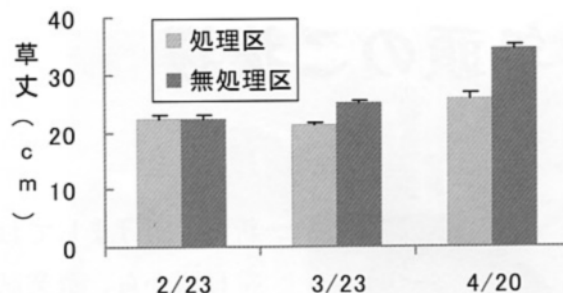


図1 ビピフルフロアブル散布と草丈
注)バーは標準誤差。

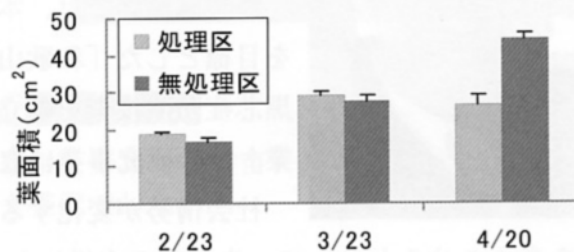


図2 ビピフルフロアブル散布と葉面積
注)バーは標準誤差。新生第3葉の中央小葉を測定。葉面積=葉身長×葉幅÷2による推定値。

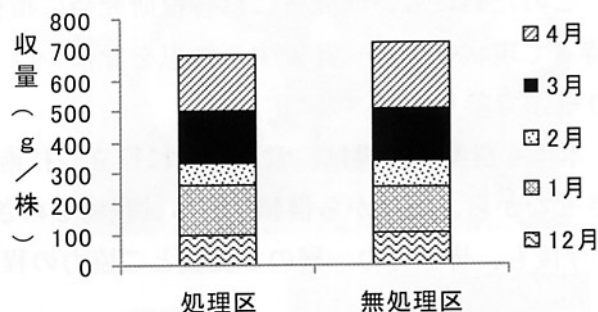


図3 ビピフルフロアブル散布と時期別収量
注)収量は7g以上の果実合計

4. おわりに

イチゴ「まりひめ」へのビピフルフロアブル散布は、草丈が短くなり、春先の徒長抑制効果が確認された。しかし、作業性が改善される一方で、4月の収量が低下する傾向が認められたことから、使用の際は株の生育状況等から時期・量・回数等を判断する必要がある。

なお、ビピフルフロアブルは、イチゴに植物成長調整剤として登録されており、使用の際は登録内容を遵守する。

(栽培部 田中寿弥)